

令和5年度 年度末自己評価書

愛南町立平城小学校

【評価基準】 A：目標を達成 B：8割以上達成 C：6割以上達成 D：6割未満

年度末

I 正しい子

重点目標	評価指標及び目標値（期待される姿）		評価	考察（◇）及び改善方策（◆）	評価資料	アンケート結果				
						肯定割合	4	3	2	1
あいさつができる子を育てる。	指標① 進んであいさつをしているか。	中間期	A	◇肯定割合90%以上でA判定である。児童は校内の決まった場所では大きな声で挨拶ができるが、違う場面になるとできにくいことが多い。それが児童と保護者・教職員の評価の違いに表れていると思われる。 ◆どんな場面でも気持ちのよいあいさつができるように粘り強く声を掛け続けることで児童の意識統一を図る。また、学級でも自分から声を出せる子とできない子が決まっているため、授業開始と終了の挨拶でみんなが声を出せる集団作りを行う。校内では挨拶チェックが効果的であったため、挨拶チェック家庭バージョンなど、保護者の意識も変えていきたい。	児童アンケート①	96	60	36	4	0
	目標値 児童・保護者・地域住民・教職員の90%以上が肯定割合（4+3）	年度末	A	◇全体的には中間期に引き続き肯定割合90%以上でA判定となった。これまでの取組の成果により児童、教職員の割合は高いが、保護者や地域の評価は下がっている。校内での様子と校外の様子に違いがあるため、校外での挨拶についての取組を検討する必要があると考えられる。 ◆これまでの取組で、子どもたちにも変化が見られるようになってきた。よい挨拶は褒め、できていない子には引き続き声掛けを行う取組を今後も継続していく。また、登校班長の交代を機会に、地区別児童会や登校班長会を実施し、リーダーの指導を行うことで登下校中の地域での挨拶の変容を図りたい。	保護者アンケート①	90	37	53	9	1
返事ができる子を育てる。	指標② 返事がしっかりとできているか。	中間期	A	◇肯定割合90%以上でA判定である。児童は大きな声で返事ができ高評価ではあるが、指示を理解せず、反射的な返事が多い。 ◆授業や集会などで、場に応じた声の大きさを意識させることを徹底する。大きな声で返事ができていることは褒め、授業中や学校生活の中の様々な場面で指示されたことや内容について問い返し、理解が伴う返事であるかどうかを確認したい。	地域住民アンケート①	100	27	73	0	0
	目標値 児童・教職員の90%以上が肯定割合（4+3）	年度末	A	◇中間期同様、児童、教職員とも高評価となった。学習発表会でも子どもたちの声が大きくなり子どもたちも返事をする場面、必要性が分かってきている。ただ、機械的な返事は相変わらず見られたり、「相手によって返事を変える児童がいる」という意見もあるので、引き続き指導が必要である。 ◆できていることは褒め、できていない児童については、見逃さず指導を継続する。また、分からないことは分からないと安心して言える雰囲気作りに取り組む。	教職員アンケート①	94	0	94	6	0
学校関係者評価委員の意見	・不審者対応もあり、子どもたちは、知らない人には挨拶しにくい状況がある。学校では、誰にでも声に出して挨拶をする環境を作るとよいが、地域では、会釈や笑みだけでもよいのではないかと。 ・親がお手本となり、家庭から挨拶の習慣を作っていく。 ・ありがたの感謝の気持ちを表すことから広がっていくのではないかと。 ・地域とのつながりを作る機会の設定が大切になってくる。 ・ながら返事ではなく、内容を理解し、相手の目を見て返事できるとよい。	学校の対応		○まずは、校内で子どもたちが元気な声で挨拶できるようにするため、児童会や人権委員会を中心とした挨拶運動や挨拶チェックを継続していく。また家庭での挨拶習慣の定着を目指し、挨拶チェックの家庭バージョンに取り組むことで、家庭への啓発を行う。 ○コロナの影響で地域とのつながりが弱くなってきているため、今年度は、見守り隊の方の確認を行い、連絡体制の確立や、見守り隊の方に感謝の気持ちを伝える交流会を復活させる。 ○単に反応するだけの返事にならないよう具体物やジェスチャーなどで視覚に訴えたり、声のトーンや話す速さを変化させるなど問いかけの仕方に配慮しながら、理解を伴う返事となるよう、確認をしていく。	児童アンケート②	93	54	39	7	0
	・大きな声の挨拶はいいことだが、そうでなくても気持ちは通じる。地域では、気分や体調などでできないこともある。 ・地域とのつながりが薄くなっていることも影響している。地区清掃やお祭り、公民館行事等に家族で参加し、地域の人と交流することで挨拶ができるようになるのではないかと。 ・挨拶、返事の意味や効果について理解させることが大切。挨拶であればその日の体調や心の様子、返事は自分の発言に対する意思の伝わり方や理解の度合などを知らせるサインとなるので、まずは習慣付けをし、気持ちを込めたものにしていければいい。				教職員アンケート②	94	6	88	6	0
学校関係者評価委員の意見	・大きな声の挨拶はいいことだが、そうでなくても気持ちは通じる。地域では、気分や体調などでできないこともある。 ・地域とのつながりが薄くなっていることも影響している。地区清掃やお祭り、公民館行事等に家族で参加し、地域の人と交流することで挨拶ができるようになるのではないかと。 ・挨拶、返事の意味や効果について理解させることが大切。挨拶であればその日の体調や心の様子、返事は自分の発言に対する意思の伝わり方や理解の度合などを知らせるサインとなるので、まずは習慣付けをし、気持ちを込めたものにしていければいい。	学校の対応		○児童会や人権委員会を中心とした挨拶運動を継続し、校内での明るい挨拶を習慣づける。また、登校班長会を実施し、リーダーの指導を行うとともに、最高学年となる5年生の挨拶指導を強化する。登校指導の際、地区担当者が挨拶を評価し、よい挨拶は称賛し、できていない児童については指導を行う。 ○挨拶の意味や効果について学年に応じて理解させ、心のこもった挨拶ができるようにする。 ○機械的な返事に見受けられる場合は、内容について問い返したり、表現を変えたりして、しっかりと伝わっているか確認をする。また、必要に応じて具体物やジェスチャーを交え、声のトーンや話す速さを変化させて、理解を伴う返事ができるようにしたい。	児童アンケート②	92	51	41	7	1
	・大きな声の挨拶はいいことだが、そうでなくても気持ちは通じる。地域では、気分や体調などでできないこともある。 ・地域とのつながりが薄くなっていることも影響している。地区清掃やお祭り、公民館行事等に家族で参加し、地域の人と交流することで挨拶ができるようになるのではないかと。 ・挨拶、返事の意味や効果について理解させることが大切。挨拶であればその日の体調や心の様子、返事は自分の発言に対する意思の伝わり方や理解の度合などを知らせるサインとなるので、まずは習慣付けをし、気持ちを込めたものにしていければいい。				教職員アンケート②	94	18	76	6	0

2 考える子

確かな学力の定着と向上に努める。	指標③ 授業が分かっているか。 目標値 児童・教職員の90%以上が肯定割合（4＋3）	中間期	A	◇児童、教職員ともに94%が肯定していてA判定である。しかし、児童の学習の理解や定着の個人差が大きいことが課題になっている。そのため児童の自己評価は高いが、児童自身が自分の習熟度について正しく理解することが大切であると考ええる。 ◆振り返りや対話を大切に授業展開の共通実践を進めているところである。その中で、自分は何が理解できているか、分からないことは何かを自覚する時間を確保するとともに、分からないことを「分からない」と伝えることのできる学習集団作りに努める。	児童アンケート③	93	60	33	7	0	
					教職員アンケート③	94	6	88	6	0	
		年度末	A	◇中間期と同様、児童、教職員とも高い評価となりA判定であった。しかし、実態として学習の定着に関しては個人差が大きくなってきているという声もあり、自分自身の理解度が分かっているという児童もいるように思われる。 ◆教師主導の教え込み型の授業から児童が対話し学び合う型へと授業改善の流れを共通化し、ペアやグループでの学習を取り入れることで学習形態を工夫したり、ICT機器を活用したりして個に応じた対応をする。	児童アンケート③	94	59	35	6	0	
					教職員アンケート③	94	18	76	6	0	
	指標④ 授業でICTを積極的に活用しているか。 目標値 児童・教職員の90%以上が肯定割合（4＋3）	中間期	A	◇児童、教職員ともに95%を超えており、ICTの活用を積極的に行っていると言える。一方で児童に2の評価が5%あり積極的に活用できていないと感じる児童も一定数いる。また、教職員に3の評価が44%あり、さらなる質の向上を求めていることが考えられる。 ◆発達段階に応じて、クロームブックの操作に慣れさせ、EILSやGoogleのアプリ、ミライシードなどのソフトを活用する場面を増やし、学力の向上に繋げる。また、授業の中で活用する際の環境の整備を進め、より効果的にICTを活用できるようにしていく。	児童アンケート④	95	81	13	6	0	
					教職員アンケート④	100	56	44	0	0	
		年度末	A	◇児童、教職員ともに98%を超えており、中間期に引き続き、ICTを積極的に活用しているといえる。授業では、個別のドリル学習、グループでの話し合い、作品鑑賞、自己評価などの場面でICTを活用した。また、タイピングの技能も高まってきた。 ◆授業の中の様々な場面で機器の活用をするようになったので、それぞれの効果的な活用についての実践を持ち寄った研修を行い、個々の技能を高める。また、ICTを活用した学びの蓄積や蓄積されたデータの分析・活用についても研修を行う。	児童アンケート④	98	80	18	2	0	
					教職員アンケート④	100	47	53	0	0	
指標⑤ 家庭学習を毎日15分×(学年)以上しているか。 目標値 児童・保護者の90%以上が肯定割合（4＋3）	中間期	B	◇昨年度末評価より、児童7ポイント、保護者5ポイント伸び、CからB評価になった。今年度は家庭学習の手引きを作成し、すくすくカードとともに、家庭学習の時間を児童自身に意識して取り組ませている。しかし、習慣化している児童は限られているように見える。また、宿題への取り組み方にも個人差があり、その差をどのように埋めていくかが課題である。 ◆放課後の活動やスポーツ少年団の活動、個々の習い事等、児童の帰宅後の時間は短い。その中での家庭学習時間をどのようにとらえるかを教職員と児童で共通理解を図ることも大切だと考える。「家庭」という場所に限らず、宿題を含む学習に取り組む時間としてとらえ、授業以外での学習習慣の定着を図ることを意識させたい。	児童アンケート⑦	80	47	33	15	5		
				保護者アンケート②	85	35	50	12	3		
	年度末	B	◇中間期から、保護者の評価が12ポイント下がったが、B判定であった。一定数の児童は、まだ家庭での学習習慣が定着してるとは言えない状況である。保護者の評価に関しては、週末の学習において、金曜日に課題を終わらせ、土日は自由に過ごす児童もあり、そのような姿を見ての評価があると考えられる。 ◆家庭学習の手引きやすくすくカード等の活用による家庭学習の意識付けを継続し、さらに宿題の質や量の改善を図ったり、ICT機器も活用したりして個に応じることができるようになる。	児童アンケート⑦	81	48	33	15	4		
				保護者アンケート②	73	32	41	24	3		
指標⑥ 毎日家庭読書をしているか。 目標値 児童・保護者の90%以上が肯定割合（4＋3）	中間期	C	◇学校では、読書への関心を高めるための手立てをいくつか取っており、読書をする機会は増えているが個人差が大きい。また、高学年になるに従い、生活サイクルが変化してくるため、家庭で過ごす時間は短くなり家庭読書の時間を毎日確保することはできないと思われる。生活時間帯が異なることから、家庭での読書を保護者が見る機会も少ないのではないかと思われる。その結果が肯定率の低さになっていると考えられる。 ◆本の福袋に関心が高いため、低学年ではその本を親子読書に活用し、保護者を巻き込んだ家庭読書を促す。高学年においては、家庭での生活の時間を見直しを行い、週単位や月単位で目標設定を行う。	児童アンケート⑧	72	40	32	18	10		
				保護者アンケート④	54	17	37	37	9		
	年度末	C	◇中間期に比べて、児童、保護者とも肯定割合が下がった。様々な手立てを講じて、読書に対する関心を高めようと努めているが、家庭読書の時間を増やすまでには至っていない。 ◆まずは、読書習慣の育成に向け、学校での朝読書の時間を設定し、毎日、隙間時間を使って少しずつでも取り組めるようにする。そこから週末の家庭での読書につなげ、読書に親しませることで読書を身近なものにさせる。	児童アンケート⑧	67	34	33	23	10		
				保護者アンケート④	45	10	35	40	15		
学校関係者評価委員の意見	・学習後も理解した内容が定着しているかが課題。学習の積み重ねが必要。 ・すべての子どもがすべて分かる学習を求めるのではなく、それぞれの評価を大切に子どもが満足する学びを考えてほしい。 ・クロームブックにはフィルタリング機能が働いており、調べ学習をしても調べきれないことがある。 ・親子読書の日やノーメディアデーを実施してほしい。 ・隙間時間を使った読書ができればよい。また、週末読書だと時間を確保しやすいのではないだろうか			学校の対応	○めあてから振り返りまでのつながりや対話を中心とした授業改善に取り組み、児童一人一人が自分の変容を自覚できる授業づくりに取り組んでいく。また、その前提として互いを認め合い支え合う集団となるよう学級経営についても改善を進める。 ○家庭での読書については、今年度から取り組んでいる本の福袋が子どもたちにも好評なので継続していきながら、低学年については親子読書につなげていき、中学年以上の子どもたちについては、週単位での達成目標を持たせ、週末読書への意欲を喚起させる。また、今年も家族読書を実施し、家族ぐるみの読書を啓発し、家庭にも働きかけていきたい。感想等もクロームブックを活用して子どもたちの入力だけでなく、保護者からも感想をいただく。 ○家庭学習については、その取り組み方の共通理解を図り、塾や放課後の補充など様々な時間、場所を学習習慣の定着につなげていきたい。						
	・ICTの活用に関しては、書く活動とのバランスを考える必要がある。ノートの活用も重要である。 ・家庭学習・読書はできていない児童にとってはかなり難しい。個別に目標を立て、その達成度を評価してあげればよい。 ・宿題が早く終わった子どもは、自主学習や個々の興味関心に基づく主体的な学びに取り組ませるなど、学びの捉え方を変える必要がある。 ・読書の良さをアピールするとよい。（読める→心が育つ→書ける） ・本に親しむという観点で、電子書籍の導入を検討しては。 ・ノーメディアデー、親子読書は効果がある。 ・読書に関しては、指標の見直しの必要がある。				○授業の基本である学級経営を大切にし、支持的風土の中で認め合いながら児童が学習できるような環境を整えていく。また、基本的な授業の流れができてきたので、それを学校全体で共通理解、共通実践していく。 ○ICTを授業で用いるツールの一つであることを意識して、これまでの学習活動の中にバランスよく取り入れながら、授業改善に取り組んでいく。また、自主学習や個々の興味関心に基づく主体的な学びに適したツールでもあるので、これらの面からも活用する場面を広げていく。 ○読書の質を高め、楽しさを味わうための指標の見直しを行う。その指標を達成するために、最低限、低学年、高学年に目標を分けて取り組ませる。低学年では、ノーメディアデーとリンクさせ親子読書を位置づけたり、親子での感想を記録として残すことで、児童の読書意欲喚起につなげる。高学年では、させられる読書ではなく、主体を自分として、月・週単位など自己の目標を明確に持たせる。そして、それに向かって努力しようとする主体的な取組を支援し、読書の楽しさを見出し生涯読書の素地を培う活動を進める。						

3 強い子

健やかな体を育てることに努める	指標⑦ 「早寝・早起き・朝ごはん」ができているか。 目標値 児童・保護者の９０％以上が肯定割合（４＋３）	中間期	B	◇食育の取り組みの成果もあり、「朝ごはん」に関しては、ポイントが高いが、すすくカードの結果を見ると、朝起きるのが遅いために朝ごはんを食べていない児童が数名いる。このような点から児童、保護者ともに「早寝・早起き」などの生活習慣について課題を感じており、B判定になっていると思われる。 ◆食育の取り組みを続けて行く中で、基本的な生活習慣を整えることの大切さを根気強く伝えていく。また、家庭への啓発については、「食育だより」「すすくカード」朝の健康観察などを利用して児童に声掛けを続け、児童の取り組みについて家庭からのフィードバックをもらい、保護者の協力を得ることで生活習慣の改善を図りたい。	児童アンケート⑨	87	57	30	9	4
		年度末	B	◇児童の肯定割合は上昇したが、保護者の割合は変わらずB判定である。すすくカード等で児童の生活の様子を見ると、少数ではあるが、ゲームやネットにより早寝ができない。そのため早起きでせずに朝食が摂れないという生活習慣の児童がいる。今後、いかに家庭の協力を得るかが課題と思われる。 ◆食育の取組や学級活動、学校だより、学級だよりを活用して児童、保護者への生活リズムの重要性についての啓発を行う。	児童アンケート⑨	90	58	32	7	3
	指標⑧ 外で元気に遊んでいるか。 目標値 児童・地域住民の９０％以上が肯定割合（４＋３）	中間期	A	◇児童、地域住民ともに、高いポイントを得ており、新型コロナの５類移行が追い風になり、以前よりも外で元気に遊んでいると思われる。しかし、外で遊べない子、遊ばない子に対しての手だてが必要である。 ◆継続して、学級遊びなどを通して児童全員が外で元気に遊ぶよう呼びかけていくと同時に、補充学習や直しの時間設定について検討が必要である。また、水分補給に気を付ける、危険な行為をしないなど声掛けを継続する。	児童アンケート⑩	83	55	28	9	8
		年度末	A	◇補充学習や直しの時間を設定することで、児童の休み時間を、確保できるようにしたため、肯定割合は90%を超えA判定となった。 ◆学級遊びなどを通して、学級が一体となった外遊びを励行する。また、体育の時間で行うなわとびや鉄棒などから、休み時間の活動に発展させ、外遊びの習慣化に努める。	児童アンケート⑩	82	53	29	14	4
					地域住民アンケート②	100	12	88	0	0
					地域住民アンケート②	100	11	89	0	0

学校関係者評価委員の意見	・食育だよりにレシピが載っているので、ぜひ家庭で試すとよい。 ・気持ちよく目覚めるためにも、ゲーム時間の管理はするべきである。 ・朝ごはんを食べずに昼まで過ごすのか？食べないまま登校させる保護者の感覚も何とかしたい。 ・宿題の直しのためにいつも外遊びができないことにならないように昼休みは遊ばせてほしい。 ・学校、地域での体験的活動の時間を充実させることができるとよい。 ・コロナも５類に移り、子どもたちが遊ぶ機会は増えてきたが、保護者の人間関係が子供に影響している。	学校の対応	○食育の研究を、子どもたちの基本的な生活習慣の確立につなげていきたい。そのためにも授業を通した子どもたちへの指導だけでなく、その内容について子どもを通して家庭にも伝え、家庭からの感想をもらうことで、子どもたちに活動を知ってもらう。また食育だよりを中心に学校での活動報告だけでなく、保護者に向けた啓発コーナー等を作ることで家庭への啓発に取り組む。 ○外で遊ばない子については、学級遊びの時間を設定し、クラスみんなが揃って遊ぶ時間を設定することで、その楽しさを味わわせる。また宿題の直し等で遊べない子がいるが、子どもの休憩時間をいわずに奪うことがないよう、直しや補充の時間の設定を学級任せにするのではなく学校全体で検討していく。 ○社会体育や公民館主催の体験活動を啓発し、地域と連携して体験活動を経験させる。
	・ゲームが終わってから宿題に取り組むことをなくすなど、家庭でのルール作りや啓発を根気強く続けることが必要。 ・高学年になると早寝が難しくなる。家族の生活の見直しが必要。まず、朝のスタートの環境を作る（遅く寝ても早く起こす、朝の光を部屋に入れる。）		○食育の研究は今年度で終わるが、食育だよりの発行を中心に、今回の研究で実践した取組を可能な限り継続していく。また、栄養教諭と連携し、指導の充実を図る。 ○望ましい生活習慣の定着に向け、「すすくカード」、朝の健康観察などを通して、実態を把握し、学級通信や懇談会などを活用して、保護者への啓発を図る。 ○体育の時間の活動（なわとび、鉄棒など）を、休み時間の活動につなげ、外遊びの習慣化につなげる。

4 生徒指導

生徒指導の徹底と健全育成に努める	指標⑨　楽しく学校生活を送っているか。	中 間 期	A	◇児童、保護者ともに90ポイントを超える高い数値で肯定されているが、楽しく学校生活をおくれていると感じている児童については注意して見ておく必要がある。 ◆なかよしアンケートや教育相談などを活用して、細かく児童を観察し、小さなサインを見逃さないように注視する。学校が楽しくない児童には個別に理由を聞き、どうすれば楽しくなるか一緒に考えたい。補充学習や直しのための時間を日々確保しなければ、結局しわ寄せがきて苦しむのは児童である。何か特別なことをするのはなく、毎週金曜日は「コミュニケーションをとる日（仮）」とし、全教職員ができるだけたくさん児童に声を掛けることで児童理解を図ってきたい。	<table><tr><td>児童アンケート⑪</td><td>91</td><td>67</td><td>24</td><td>8</td><td>1</td></tr><tr><td>保護者アンケート⑤</td><td>98</td><td>69</td><td>29</td><td>2</td><td>0</td></tr></table>						児童アンケート⑪	91	67	24	8	1	保護者アンケート⑤	98	69	29	2	0
				児童アンケート⑪	91	67	24	8	1													
	保護者アンケート⑤	98	69	29	2	0																
	目標値　児童・保護者の90%以上が肯定割合（4＋3）	年 度 末	A	◇肯定割合は90%を超えておりA判定であった。楽しいと思わない児童の割合が減少しており、これまでの取組の成果が出てきていると考えられる。 ◆仲よしアンケートや教育相談の実施により、多角的な視点で児童を見つめ、些細なサインを見逃さないようにする。また、楽しくないと思っている児童について職員で共通理解を図り、学担を中心に児童に寄り添った対応を心掛ける。	<table><tr><td>児童アンケート⑪</td><td>96</td><td>76</td><td>20</td><td>3</td><td>1</td></tr><tr><td>保護者アンケート⑤</td><td>96</td><td>63</td><td>32</td><td>5</td><td>0</td></tr></table>						児童アンケート⑪	96	76	20	3	1	保護者アンケート⑤	96	63	32	5	0
児童アンケート⑪	96			76	20	3	1															
保護者アンケート⑤	96			63	32	5	0															
学校関係者評価委員の意見	・楽しいこと、面倒くさいくないことを「楽しい」と捉えていないか。しんどいこと、面倒くさいことも頑張れる子どもたちになってほしい。 ・やっていいこと悪いことなどの加減が分かるように指導することが必要ではないか。 ・コミュニケーションをとる日も大切なことだが、時間を見つけて教育相談の時間を充実させる必要があるのではないかな。			学校の対応	○学校が楽しくと感じない児童について、共通理解を図り、全職員で見守ることができるようになる。またそのように感じている児童については、どうすれば楽しくなるか、共に考え自ら解決に向けて歩むことができるようになる。 ○コミュニケーションをとる日の実施に向けて、取り組み内容について早急に検討し実施する。また、教育相談についても、学担一人が行うのではなく、学期に1回は全教職員による教育相談の時間を設定し、一人一人の児童に大勢の職員が関わるような体制づくりに取り組む。																	
	・楽しいと思わない児童の割合が減ったのは素晴らしいこと。引き続きそういった児童への対応を継続してほしい。 ・頑張って達成できたことが嬉しいと思える小さな成功体験の積み重ねが「楽」＝「楽しい」ではないということに気付かせることにつながると思う。そのような体験を学校・家庭・地域で蓄積させていければと思う。 ・辛いこと、苦しいこと、嫌なことを乗り越えた後の楽しさを味わってほしい。				○学校が楽しくと感じない児童については児童を見つめる会などの時間を使って、共通理解を図り、全教職員で見守る体制を作る。それと合わせて「学校が楽しい」とはどういうことか学年に応じて考えさせ、楽をすることや好き勝手することが「楽しい」のではないことに気付かせる。そして、学習や友達関係を築く上での本当の楽しさを理解させる。 ○教育相談の時間を確保することで、一人一人の児童に複数の職員が関わり、児童の本音や楽しさを引き出す。																	

5 教職員

教職員の人間力・指導力・組織力の向上に努める	指標⑩	研修の自己研鑽に努めているか。	中間期	B	◇食育や郡教研の研究指定を受け、それぞれの立場で研究の推進に取り組んでいるところである。1学期から授業研究を実施し、特に授業者は研究主題をどのように取り入れていくか自己研鑽に努め、実践を進めた。日々の業務は多いが、一人一人が課題意識を持って授業準備を進めたり、児童に関わったりする必要がある。 ◆「自己研鑽」として時間を確保することは難しいが、日々の業務を、課題意識を持って取り組むことで自己研鑽に努めることができると考える。また、これまで制限の多かった校外研修の機会も増えてきている。積極的に研修に参加するとともに、研修内容を周知することで、自他の研修につなげたい。	教職員アンケート⑤	88	13	75	12	0
	目標値	教職員の90%以上が肯定割合（4＋3）									
	年度末	A	◇授業研究を中心に研修を進め、肯定割合も90%を超え、A判定となった。日々の研修や授業研究で得た知見を実践することができていると考えられる。 ◆郡教研の研究指定に向けて、校内研究の時間や「研修だより」を活用し、それぞれの立場で研修を進め、自己研鑽を深める。また、対外的な研修会の資料など回覧し、新しい情報を共有する。	教職員アンケート⑤		94	18	76	6	0	
学校関係者評価委員の意見	・教員の忙しさを理解する必要もあるのではないかと。 ・学習指導に関連した研修だけでなく、アンガーマネジメントなど多様な研修を行う機会を持つとよい。			学校の対応	○学級経営、授業改善など日々の現場の経験を重視し、課題意識を持って取り組んでいく。校内研修では、2学期以降授業研究を中心に実践的な校内研修を進め、教職員一人一人が主体的に取り組めるようにする。また、学習指導だけでなく多様なテーマで研修を進めていき、やられる研修から主体的に取り組んでいけるように、研修会の実施方法を検討していく。						
	・日々忙しい中での研修時間の確保は大変だと思うが、中間期より評価が上がり素晴らしいことだと思う。				○2月末までに全員が授業研究を終える。授業研究までには、事前に授業内容について部会内で話し合うこと、授業後には研究の視点に沿って協議することを通して、一人一人が研修に主体的に取り組むことができた。今後も課題点を共有し、検討しながら、多様な研修に取り組む。 ○各研究会の参加報告や資料の回覧などを通して、新しい情報を取り入れる。						